



Title	福岡市若年層方言における2つのゴトの形態統語的違い
Author(s)	原田, 走一郎
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2014, 12, p. 14-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

福岡市若年層方言における2つのゴトの形態統語的違い

原田 走一郎

【キーワード】ゴト、単文化、人魚構文、福岡市方言

【要旨】

本稿では、福岡市若年層方言におけるゴトの形態統語的記述を行う。意味的に異なる2つのゴト（様態用法と希望用法）であるが、それらが形態統語的にもまったく異なる特徴を示すものであることを述べる。様態用法のゴトが形式名詞であるのに対し、希望用法のゴトは接尾辞である。様態用法のゴトは、ガノ交替を起こすという点において、「連体修飾節＋名詞」の構造と共通性がある。しかし、希望用法のゴトではガノ交替は起こらない。このようなことから、様態用法のゴトの場合、完全な連体修飾構造ではないにせよ、かなりその構造を保っているのに対し、希望用法のゴトに関してはそのような構造はほぼないということが言える。このことから、福岡市若年層方言のゴトが加藤（2010）の述べる「単文化」の例であるということが言える。

1. はじめに

福岡市若年層方言には、以下のように使用されるゴトという形式がある¹⁾。

- (1) 今日は雨が降るゴトある

「今日は雨が降るようだ」

- (2) （禁煙を試みている最中なのに、周りで友人が吸い始めて）

タバコ吸おうゴトある

「タバコ吸いそうになる/ 吸いたい/ 吸ってしまいたい」

本論文では、これらのゴトの形態統語的特徴の記述を目的とする。そのため、意味については簡単に触れるのみとする。なお、本論文では、筆者（3歳から18歳まで福岡市在住、2014年3月現在31歳²⁾）の内省をもとに記述を行う。

本論文の構成は、以下のとおりである。まず2節において、上で見た2つの用例が2つの異なる用法であることを確認し、簡単にまとめる。その際、簡単な意味の記述も行う。また、2つのゴトに共通する、述語化する際の特徴についても述べる。続く3節では、2つ

-
- 1) これらのゴトの用法には年齢差がある。坪内（2005）は同じ福岡市方言のゴトを扱った論考であるが、上の（1）と同じ用法で動詞の推量形（本論文で意志形と呼んだ形と同形）が前接する（「雨が降ろうゴトある」のように）など、筆者の直感とずれがある。ちなみに筆者の父（福岡市出身、2014年3月現在62歳）にとってはこの「雨が降ろうゴトある」は自然であるとのこと。また、「今日は雨が降るとのゴトある」のように準体助詞「と」を挟んだ用法も坪内（ibid.）では文法的とされるが、筆者の内省ではこの言い方は非文とまでは言えないものの、そもそもこのような言い方をしないため、今回は考察の対象外とする。
- 2) 31歳が若年層かどうかという繊細な問題には触れない。ただし、今回は上の注で示したような世代差を考慮し、若年層方言としておく。

の用法のうちの1つである様態用法のゴト（（1）の用法）の記述を行う。続く4節では、もう一方の希望用法のゴト（（2）の用法）の記述を行う。5節は本論文のまとめと考察である。6節では今後の課題を述べる。

本論文の要旨を簡単にまとめておく。本論文では、2つのゴトはまったくふるまいが異なるということを述べる。具体的には、様態用法のゴトは形式名詞であり、連体修飾節＋名詞という構造をいくぶんか残しているのに対し、希望用法のゴトは接尾辞となっており、連体修飾節＋名詞という構造からは離れている、ということを述べる。そしてこの違いは、加藤（2010）の述べる「単文化」という現象によるものであり、語源を同じくする形式が異なる様相を呈する興味深い例であると述べる。

2. ふたつの用法

本節では、まず、2つのゴトのそれぞれの意味的特徴を簡単にまとめる（2.1.）。続く2.2.においては、述語化する際の特徴についても述べる。この述語化する際の特徴は2つのゴトの間で差がないため、対照を行う次節以降ではなく、本節で指摘しておく。

2.1. ふたつのゴトの意味的特徴

先の（1）、（2）からもわかるように、意味的にかなり異なる2つの用法がゴトにはある。まず、簡単にこれらの違いをまとめておく。（1）の用法は、前接する形式が属格の「の」と活用語の連体形式³⁾であり、意味的には、様態や比喩などをあらわす。これに対し、（2）の用法は、前接する形式が動詞の意志形であり、意味的には、希望に近いものをあらわす。本論文では、便宜的に（1）の用法を様態用法、（2）のほうを希望用法と呼ぶこととする。様態用法の属格の例を示し、続いて、その下の表1にそれらの違いを簡単にまとめておく。

- （3）（あそこを飛んでいる）あれは飛行機のゴトある
「あれは飛行機ようだ」

表1 ゴトの2つの用法のまとめ

	前接する形式	意味
様態用法	属格「の」 活用語の連体形式	様態、比喩 etc.
希望用法	動詞の意志形	‘希望’

なお、いずれのゴトも、主文末以外でも生起しうる。以下に例を示しておく。（4）が様態用法、（5）が希望用法の例である。この点についてはのちにそれぞれ詳しく述べる。

- （4）山のゴト、本を積み上げた

3) 本方言の活用語で、連体形と終止形の違いがあるのは、形容動詞のみであり、他の品詞においては連体形と終止形は同形である。

「山のように、本を積み上げた」

(5) 僕はいつも死のうゴト思っていた

「僕はいつも死にたいと思っていた」

ここで、簡単にゴトの意味について述べておく。坪内(2005:89)では、「「近似した二つの世界の事態に言及する」機能を持つ。「AはBのゴター」という場合、Aを語る、あるいは承認するためにBをその近似した事態として引き合いに出してくる」と述べられている。これを参考にして、本研究では、ゴトはなにかとなにかが近似している、ということであらわすものとする。したがって、「タバコ吸おうゴトある」(希望用法)と言った場合、「「吸おう」という状態に近い」ということを意味し、積極的に「吸いたい」ということを意味しているわけではない。そのため、福岡市若年層方言における希望用法のゴトの典型的な用例は、(2)のようにそれを欲することが好ましくないにも関わらず欲してしまう、という感情を述べるものである。

2.2. 述語化する際の特徴

本節では、ゴトを述語化する場合について述べる。本節において述べるのは、①ゴトは「ある」を用いて述語化する、②「ある」が存在動詞としてではなく、ゴトを述語化するために用いられた場合、ゴターという形式が許される、③このことはゴトを用いた述部が単文化しているという考え方を支持する、という3点である。

通常(ゴトを除く、という意味)、副詞節を述語化する場合、コピュラを用いる。これは、標準日本語と同じである。

(6) あいつが泣いたのは、悲しかったけんやった

「あいつが泣いたのは悲しかったからだった」

(7) あいつが泣いたのは卒業する時やった

「あいつが泣いたのは卒業する時だった」

しかし、ゴトの副詞節に関しては「ある」を用いて述語化する。

(8) あいつが泣いたゴト {あった / *やった}

(9) 僕は泣こうゴト {あった / *やった}

ちなみに、他のいわゆる人魚構文においては、述語化の際にたいていコピュラが用いられる。

(10) あいつが泣いたみたい { *あった / やった }

(11) あいつが泣いたと { *あった / やった }

したがって、この点においては、ゴトは特殊である⁴⁾。

4) ただし、このような例はゴトだけではない。「くらい」が形成する副詞節は、「ある」でもコピュラでも述語化できる。

(あ) 昨日は恥ずかしくて、泣くくらい {あった / やった}

(い) 四月の沖縄は暑いくらい {あった / やった}

また、ゴトを述語化する際には、「ある」以外を用いることはできない。特に、他の方言では可能である「ゴトない / ゴトなか」という用い方（長崎県佐世保市宇久方言に関して、門屋 2011:53）は、福岡市若年層方言においては非文法的である。

(12) *今日は雨が降るゴトない

(13) *タバコ吸おうゴトない

このことは、同方言におけるゴトの使用範囲が他方言に比べて狭いことを示しているものと思われる。

続いて、「ある」を用いて述語化された場合のゴトが示す音韻的な現象について述べる。以下の(14)、(15)のように、「ゴトある」が「ゴター」というように発音される場合がある、というものである。

(14) 今日は雨が降る {ゴトある / ゴター}

(15) タバコ吸おう {ゴトある / ゴター}

通常が存在動詞「ある」の場合、このような形式は許されない。

(16) 宿題が山のゴト、ある (*ゴター⁵⁾)

「宿題が山のように存在する」

しかし、「ゴトある」が述部の場合はこれが頻繁に起こり、過去の場合などもこれが許容される。

(17) 今朝は雨が降るゴタッタ

(18) タバコ吸おうゴタッタ

このような変異を持つことから、「ある」が独立した述部としてとらえられていないことがうかがわれる。これは、後に述べるゴトを含む述部が単文化している、というとらえ方を支持するものである。

では、続く3節と4節では、様態用法のゴト、希望用法のゴトをそれぞれ記述し、対照していく。

3. 様態用法のゴトのふるまい

本節では、様態用法のゴトの統語的記述を行う。まず、ゴト自体の品詞性を確認し、そののちに、前後を含めた統語的ふるまいを記述する。結論を先に述べておくと、ゴト自体は、形式名詞と認める。そして、様態用法のゴトは、「[節]ゴト(ある)」という構造をなかば持っていることを示す。さらに、様態用法のゴトを含む節は副詞節として機能することも指摘する。

では、まず、様態用法のゴト(それ自体)がどのようなふるまいをするか確認する。様態用法のゴトは形式名詞と言ってよい。まずは、その名詞性を示していく。典型的な名詞は、名詞句のヘッドになり、格助詞をとり、項になりうるものである。しかし、ゴトは格助詞をとることはない。ただし、「なる」などの動詞の補部にはなる。

(19) あいつは、[小学校の先生]_{NP}に なった

5) 仮に「山のゴター」と言った場合、「宿題が山のようにだ」という意味になる。

(20) あいつは、[小学校で教えるゴト]_{副詞節} なった

「あいつは、小学校で教えるようになった」

(21) *あいつは、小学校で教えるゴトになった

格助詞をとることができないという点は、名詞との明確な違いである。しかし、一方で、補部になることができる、という点においては名詞との共通性がある。

先に示したとおり、格助詞はとれないが、副助詞をとることはできる。

(22) 今日は雨が降るゴトもあるし、雪が降るゴトもある

「今日は雨が降るようでもあるし、雪が降るようでもある」

さらに、「の」に関して、「NのX」という構造のX部分に入ることができるのは名詞のみであるが、ゴトはこの位置に生起可能である。

(23) 今日の雨は槍のゴトある

「今日の雨は槍のようだ」

以上、示したように、①補部になる、②副助詞をとる、③「NのX」のXの位置に立てる、という3点から、ゴトには名詞的な部分があると言える。

ただし、もちろん、典型的な名詞ではない。先にも述べたとおり、格助詞はとれない。また、単独で文中に生起し得ない。これらから、ゴトは名詞とは呼べず、形式名詞、としている。

また、動詞にも、以下の(24)に示すとおり形容詞にも後接可能であることから、このゴトは語としての自立性があるものとみなせる。以上、様態用法のゴトは形式名詞であると述べた。

(24) 明日の朝は寒いゴトある

「明日の朝は寒いようだ」

では、前後を含めて考えた場合、様態用法のゴトはどのような構造をもっているのだろうか。かたちの上では、ゴトが形式名詞である以上、前接する形式は連体修飾節と考えるのが普通である。それを図式化すると以下ようになる。

(25) [雨が降る]_{連体修飾節} ゴト ある

それでは、実際に他の連体修飾構造と同じ構造をこのゴトの様態用法が備えているのか、確認していく。2つのテストを行う。1つ目は、ガノ交替を用いたテストであり、もう1つは、主題の「は」に関するテストである。

1つ目のガノ交替に関するテストについて述べる。通常の名詞句にかかる連体修飾節の場合、福岡市若年層方言においてもガノ交替が起こる。

(26) a. 主節

昨日の大会では、太郎 {が / *の} 泳いだ。

b. 連体修飾節

太郎 {が / の} 泳いだ大会で、彼らは優勝した

このガノ交替が起こるかどうかわかるというテストを様態用法のゴトで行ってみる⁶⁾。以下の例文(27)は「の」でも「が」でも文法的である。つまり、様態用法のゴトは連体修飾節とこの点では同じである。

(27) 昨日の大会では、太郎 {が / の} 泳いだ ゴトある

「昨日の大会では、太郎が泳いだみたいだ」

このように見ると、(27)においてガノ交替が許容されるのは、述部末にモダリティ形式がくるためのように思われるかもしれない。しかし、他のモダリティにかかわる文末形式に関しては、ガノ交替は許容されない。

(28) 昨日の大会では、太郎 {が / *の} 泳いだ ゲナ

「昨日の大会では、太郎が泳いだって」

(29) 昨日の大会では、太郎 {が / *の} 泳いだ バイ

「昨日の大会では、太郎が泳いだよ」

したがって、このガノ交替の生起する理由は様態用法のゴトの持つ統語構造であると考えることができる。

続いて2つ目のテスト、主題の「は」について述べる。現代標準日本語において主題の「は」は連体修飾節内に生起できない。これは福岡市若年層方言においても同じである⁷⁾。このような主題の「は」は、以下の(30b)に示すように、様態用法のゴトにおいても生起不可能である。

(30) a. 連体修飾節

花子 {が / *は} 書いた本

b. ゴト節

僕は、花子 {が / *は} 泣いたゴトある、と思った⁸⁾

「僕は、花子が泣いたようだったと思った」

上に示したとおり、この点においても、通常の連体修飾節とゴトの間に違いはない。

以上、2つのテストを用いて、ゴト節と通常の連体修飾節との異同を確認した。ガノ交替、主題の「は」、どちらに関しても、様態用法のゴトは連体修飾節(+名詞)と同じふ

6) ここで、注意が必要なのは、加藤(2010)も指摘するとおり、肥筑方言においては主節においても主語を「の」でマークすることがある、ということである。ただし、意志的な動詞の場合、主節では「の」で主語をマークすることはできない(この記述は熊本市の主語標示についての坂井2013を参考にした)。逆に言えば、非意志動詞(かつ、結果状態や結果継続などのアスペクトをあらわし、かつ、典型的には無生物主語)の場合、ガノ交替が起こっているのか起こっていないのかわからないため、連体修飾節内部かどうかというテストには使えない。

(う) a. 主節

木 {が / の} 倒れとう。

b. 連体修飾節

木 {が / の} 倒れとう道

ただし、福岡市若年層方言の主格の「の」の使用がまったく熊本市方言と同じであるとは言いきれない。今後の課題である。

7) 例文は角田(2011)を参考にした。

8) もちろん、対比の「は」の場合は文法的である。

るまいを見せる。ゴトそれ自体は名詞ではないため、ここでは便宜的に、様態用法のゴトは疑似連体修飾構造をとるものとする。

4. 希望用法のゴトのふるまい

続いて本節では、希望用法のゴトの形態統語的記述を行う。前節では、様態用法のゴトについて、まずゴトそれ自体のふるまいを確認したが、希望用法のゴトにおいては、ゴトの自立性が低いため、ゴトそれ自体については確認せず、前後を含む希望用法のゴトとして記述を進める。結果を先に述べると、希望用法のゴトは、**-(j)oogoto** という風に分析するのが妥当であり、副詞節形成接辞であると言える。つまり、様態用法のゴトが語であり、形式名詞であったのに対し、希望用法のゴトは接辞であり、副詞節形成接辞である、と考える、ということである。

まず、希望用法のゴトが著しく自立性の低い要素であることを示す。様態用法のゴトが複数の品詞を承けるのに対し、希望用法のゴトは動詞の、しかも意志形しか承けない。そして、動詞の意志形はこの方言においては、下の(31) (32)に示すとおり連体形式ではない。

(31) *雨が降ろう時は、洗濯物を干すな

(32) *今から行こう場所は近い

これらの点から希望用法のゴトは語ではなく接尾辞であるとする。

しかも、正確には、「**-(j)oogoto**」という接尾辞である。まず、これは接尾辞**-(j)oo**が、主文末にのみ生起する形式であるという前提を崩したくない、という理由がある。つまり、接尾辞**-(j)oo**のあとにまた別の接尾辞**-goto**が来うる、と考えると、**-(j)oo**の位置づけが難しくなるためである。そして、のちに確認するが、**-(j)oogoto**は、必ずしも主文末のみに立つわけでない。したがって、**-(j)oogoto**は、(**-(j)oo**とは別ものの)ある種の副詞節形成接辞と考えてよいと思われる。

前節において、様態用法のゴトの名詞性を確認するテストをいくつか行ったが、希望用法のゴトは、それらのうち、①補部になる、②副助詞をとる、しか満たさない。

(33) 希望用法のゴトの名詞性に関するテスト

① (思考動詞の) 補部になる⁹⁾

a. [死のうゴト] 言った
「死にたいみたいなことを言った」

b. [死のうゴト] 思った
「死のう / 死にたいと思った」

②副助詞をとる

c. タバコ吸おうゴトもあったし、酒飲もうゴトもあった

③ 「NのX」のXの位置に立たない

9) ただし、思考動詞に限られるという点において、様態用法とは異なる。

(え) *[タバコ吸おうゴト] なった

④格助詞はとらない

d. *[死のうゴト]を 思った

⑤単独で文中に生起しない

したがって、希望用法のゴトの名詞性は様態用法のゴトに対して、低いと言える。

続いて、連体修飾構造及び、様態用法のゴトと同じ特徴を備えているかどうか、ガノ交替と主題の「は」についてテストしていく。

まず、ガノ交替は希望用法のゴトにおいては不可能である。

(34) 大学生のあいつ {が / *の} 泣こうゴトあった

「大学生のあいつが泣いてしまいたいと思った」

さらに、主題の「は」についても様態用法と希望用法の間に違いがある。

(35) 僕は、花子 {が / は} 泣こうゴトあった、と思った

「僕は、花子 {が / は} 泣いてしまいたいくらいだった、と思った」

(35) の場合、対比の「は」としてではなく、主題の「は」として文法的であるため、連体修飾構造や様態用法のゴトとは異なる特徴を持つと言える。

以上示したとおり、希望用法のゴトにおいてはガノ交替は許されず、主題の「は」をとることができる。つまり、希望用法のゴトは統語的に「連体修飾節＋名詞」という構造からはかけ離れている、ということが言える。

以上のことから、希望用法のゴトは、名詞性や自立性は低く、接尾辞として考えるべきである、と本稿では考える。

5. 考察

本節では、今まで述べてきたことをまとめ、そこからの考察を述べる。

まず、これまで様態用法のゴトと希望用法のゴトの異同を見てきた。表にまとめると以下ようになる。

表2 2つのゴトの異同

	様態用法のゴト	希望用法のゴト
それ自体の品詞 ・ 前節形式	形式名詞 ＜用言の連体形式、の＞	接尾辞 ＜‘動詞の意志形’＞
節＋名詞としての性質 ・ ガノ交替 ・ 節内の主題「は」 ・ 「も」が後続	中 ＋ ＋ ＋	低 － － ＋
意味	様態、比喩など	‘希望’

＋：連体修飾節と同じ特徴を示す －：連体修飾節と異なる

この表を見てもわかるとおり、様態用法のゴトと希望用法のゴトの間にはかなりの違いがある。

では、この違いがどのような意味を持つのか、考察していく。考察していく観点は、「単文化」（加藤 2010）というものである。加藤（ibid.:37）は現代標準日本語の「ことがある」という表現の統語構造について考察している。そこでは、「骨折したことがある」という文は、（「こと」をその語源のとおり名詞とするならば、）「[骨折した]ことがある」という連体修飾節を含む構造を持つと想定されるが、実際はそうではなく、「～したことがある」が助動詞相当となり、「骨折したことがある」が1つの述部となっていると考えるべきだ、と述べられている。

このようなことが、福岡市方言のゴトにも起こっているように思われる。つまり、様態用法のゴトでは、ガノ交替が起こり、まだ連体修飾節＋ゴト（名詞）という構造が多少なりとも保たれていたものの、希望用法のゴトにおいてはもはやガノ交替が起こらず、節＋名詞という構造はない。したがって、「あいつは泣こうゴトあった」というような文であれば、「泣こうゴトあった」がひとつの述部となっている、ということである。これはまさに、加藤（ibid.）の述べる「単文化」の例であると言える。

また、これは、角田（2011）が人魚構文について述べているような「（自立語→）後接語→接尾辞」という変化であるとも言える。ただし、角田（ibid.）の述べる人魚構文は述語化する際にコピュラを用いることが念頭にあるようなので、「ゴトある」はこれにはあたらなかもしれない¹⁰⁾。いずれにしても、ゴトは、同じ語源を持つ形式が、形態的、また、統語的に異なるふるまいをし、それが角田（ibid.）の言う「後接語」と「接尾辞」というそれぞれの段階を示している、という例である、ということは興味深い点であろう。

6. 今後の課題

本稿では、福岡市若年層方言における2つのゴトの形態統語的違いを記述した。そして、それが加藤（2010）の述べる単文化や角田（2011）の述べる人魚構文の例として興味深いということを指摘した。しかし、単文化や人魚構文のなかでゴトがどのような特徴を示すのか指摘できていない。また、本稿においては意味的な記述や用法の派生関係などについてはまったく対象にしていない。すべて今後の課題としたい。さらに、住田（1983）に示されているとおり、ゴトは九州全域に広い分布を示すが、その用法のバリエーションも大きいようである。今後は、このような地域的変異について調査を行い、その派生関係についても考察したいと思う。

【参考文献】

- 加藤重広（2010）「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学』5, pp.35-57, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
門屋飛央（2011）「ゴト（如）の通時的考察」未公開修士論文、九州大学。

10) この方言においては「ある」がある状況においてはコピュラと認められるかもしれない。この点については今後検討していきたい。

- 坂井美日（2013）「現代熊本市方言の主語表示」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp.66-83, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 住田幾子（1983）「「ゴト・ゴタル」に見る九州方言の基質」『国文学攷』98, 広島大学国語国文学会.（井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編（1999）『日本列島方言叢書 23 九州方言考 1 九州一般』ゆまに書房, pp.489-498（85-94）所収）
- 角田太作（2011）「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1, pp. 53-75, 国立国語研究所.
- 坪内佐智世（2005）「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」4 標準語の「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」と福岡市博多方言の「ゴター」—九州方言からモダリティを考える—」『日本語学』24-8, pp.88-96, 明治書院.

はらだ そういちろう（大阪大学大学院生）

soichiro.hrd@gmail.com